

地域活性化のおまつりに関する一考察

―「どっぶり、昭和町。」2010における事例研究―

○ 猪池 雅 憲 (太成学院大学)

<キーワード> 地域活性化、コミュニティ、アナログ、スローライフ

1. はじめに

大阪市営地下鉄御堂筋線 昭和町駅下車すぐ。戦前からの長屋建築で、最初の文化庁登録有形文化財になっている歴史的建造物がある。現存する4軒長屋であり。現在では昭和の雰囲気醸し出す長屋に改築され、飲食店として再活用されている。

このおまつりは平成19年(2007)、4月29日が【みどりの日】から【昭和の日】に変わるのをきっかけにはじまった。平成18年初回の約700人、平成19年約3000人、平成20年約1万人、平成21年は約1.2万人の参加者。地域と昭和の良き文化を老若男女問わず再発見していくと同時に、失われつつあるあたたかなコミュニティ関係を快活させ、昭和初期の長屋を中心に、【昭和の日】という記念日を祝うおまつりとして展開している。

本研究は、このおまつりが成熟した日本の社会に対して、次世代のパラダイムシフトへの礎としての地域に根差したプログラムとして構成されているのか検討し、「どっぶり、昭和町。」というおまつり¹⁾が、定常型社会²⁾へ向かうためのメッセージとなり、近隣住民が地域社会への回帰を触発するものなのかを考察する。

2. 「どっぶり、昭和町。」の概要

日時：4月29日(昭和の日)に開催 10時～17時(落語会は20時まで)

場所：寺西家阿倍野長屋(文化庁登録有形文化財第27-0268号)、寺西家住宅(文化財登録有形文化財第27-0338～0339)、苗代小学校、阪南中公園、桃ヶ池公園、昭和町駅周辺から阿倍野区一帯

3. おまつりの目的

- ① デジタル時代に、アナログな人のぬくもりの必要性を再認識する。
- ② 使い捨て時代に、木造長屋住宅を使い続けることによって昭和の建築文化を後世に残していく。
- ③ 昭和という時代を再確認し未来への道標とする。
- ④ 昭和町というまちを大阪中・関西圏・日本中・世界中に認知してもらう。
- ⑤ 昭和町の地域で、お年寄りからお子様まで幅広く喜んでいただくようにする。
- ⑥ 地域外からわざわざ昭和町に来られた人達にも親切にし、喜びの和を広げていく。
- ⑦ 日本全国に99カ所ある「昭和町」と連携して、「どっぶり、昭和町。」の同時開催を目指す。

4. 「どっぶり、昭和町。」2010のプログラム

実行委員スタッフ18名(16名が地元町人または勤務者)、ボランティアスタッフ80名(大学生73名、一般7名)。主な会場は寺西家、寺西家長屋、苗代小学校、桃ヶ池公園、阪南中公園の5つの会場。

落語＝アナログな生舞台公演の実施。

ライブ＝長屋の2階の建物の外に張出した露台から外を見下ろす形式で演奏する。アーティスト達が演奏する姿を引き立て、長屋が絵画でいう額縁の役割を担っている。

昭和のプロレス＝昭和時代を席卷した、娯楽としてのスポーツ観戦。

昭和の展示・出展＝昭和の阿倍野写真展、なにわ伝統野菜、きり絵など。

講演＝難波りんご。平成元年にタウン誌の阿倍野区版編集長を契機に、郷土史の調査・研究を始

める。平成7年、大阪の伝統野菜である「天王寺蕪」が野沢菜の先祖であることを発表。

ガレージセール=使い捨てでは無く、使い続けることにより価値を高めるリサイクル運動。

昭和のおもちゃ、遊びのワークショップ=手作りによる子供の遊び、紙芝居、ゴム銃、似顔絵、紙きり絵、割り箸鉄砲、飴細工、ポン菓子など

昭和町のまちがミュージアム=昭和町全域にまち歩きを実施。

全国昭和町の地域物産展=全国の昭和町との繋がりをもつ。

5. まつりの成果

平成18年より「どっぷり、昭和町。」開催をきっかけに、まちづくり面では私道上に200台を超す山積みの放置自転車があったが行政や警察の支援があり、花のある通りに生まれ変わった。このことを通じて、町内会などと連携し、地域ぐるみでまちを育てる機運が生まれつつある。また、寺西家住宅では「落語会」や「演奏会」が毎月開催されている。

6. 考察

各会場は昭和の時代を彷彿する催し物で構成され、来場者はなつかしさを覚えたり、昭和時代を知らない平成生まれの世代には新しい興行と認識されたのではないだろうか。成熟した日本社会にとって、このおまつりは現在の価値感に即したスローライフ、コミュニティといった平成の時代に失われかけているアナログ的生活を体験できたと思われる。ゆっくりと会場から会場へ移動しながら、まちなみを見、友人知人とおしゃべりをしつつ、地域の商店へ目を向け立ち寄りしていた。商店では下町らしく店主との会話が弾んでいるのも垣間見ることができた。昭和の文化を体験あるいは再評価した一日を過ごせたのではないかと考えている。

7. 結論

このおまつりは官主導ではなく、民がボランティアで始めたもので現在にいたっている。運営費

は地元からの協力で開催されている。それも、ほとんどが個人商店の協賛であり、個人の募金からである。今年で5回を迎えることができた。年々来場者数は増え、今後はより組織的な動きが必要になってくるだろう。しかし、メディアでのプロモーションが多くなるにつれ、商業化、集客目的にならないのか心配である。おまつりの規模・来場者が大きくなるにつれ、地域らしさを見失わず実施していったほしいものである。

「どっぷり、昭和町。」は地域のための地域活性化のおまつりであり。つまりは地域コミュニティ活性化のための、一年一度のおまつりとして定着していったほしい。おまつりを通じて、準備段階においては地元住民の協力、当日においては地域を巡ることによって地元の人の普段通らない地域の発見を自発的に継続した地元コミュニティへの関与を期待する。

参考文献

- 1) 大辞林：記念・祝賀・宣伝などのために催される行事
- 2) 米浪信男(2008)：「現代観光のダイナニズム」、同文館出版、P.25
- 3) 「どっぷり、昭和町。」実行委員会会則
- 4) 「どっぷり、昭和町。」企画書
- 5) 寺西家 阿倍野 長屋・町家(2010年7月7日)、<http://www.teranishike.com/>
- 6) 大阪人 vol.64、(財)大阪市都市工学情報センター
- 7) 「どっぷり、昭和町。」公式ブログ(2010年7月7日)、<http://showa-cho.com/>